

古典文学に興味を持たせる授業展開の試み

Trial of the lecture to have students more interesting to old literature

赤間 恵都子

Etsuko AKAMA

要旨

受験勉強として古典文学を扱い、古語文法に悩まされてきた学生たちは、大学の授業でも古典文学は難しいという固定観念を持っている。しかし、授業で実施した古典文学に対する意識調査の結果、古典を作品として学びその内容を知った学生たちの大方が面白いと感じて興味を持つことが分かった。筆者は学生たちの関心を古典文学に引き寄せる方法として、漫画やアニメーションを教材に使用しているが、さらに近年はアクティブラーニング的な授業方法も試みている。本稿は後者の授業について報告するものである。一つは、『源氏物語』がテーマのゼミ形式の授業で実施した「源氏双六」「宇治十帖双六」制作ワークである。2015年度には光源氏の一生をたどる双六盤を、2016年度には宇治十帖の薫の動向をたどる双六盤を作成した。楽しい作業の中に、物語全体の流れと出来事の意味を復習するという重要な課題が含まれており、意義あるワークとなった。もう一つは、『古今和歌集』を扱った授業の最終課題で、和歌に詠われた世界観を学生たちが読み取り、PC画像として表現するワークである。出来上がったパワーポイント画面には、学生たちのオリジナリティーあふれる世界が表現された。意識調査で古典が好きと答えた学生も、あまり好きでないと答えた学生も、将来的に古典の授業は必要だと思い、その意義について様々な回答を記述してくれた。古典文学を未来につなげるために、現段階では、まずは学生たちに興味を持ってもらえる授業展開方法を今後も工夫し続けていきたい。

はじめに

昨今、大学の人文系学部存在意義についての話題がしばしば取り上げられている。たとえば、平成27年に文部科学省から国立大学の組織の見直しを要請した通知が出され、人文社会学系の学部に対する「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を求めた文言が物議を醸した¹⁾。また、平成29年の春には大阪大学文学部長が人文系の真価について語った式辞²⁾が感動的だと評判になった。このような話題の根底には、人文学は役に立たないという世間一般の認識があると思われ、人文学研究に長年携

わってきた立場からは納得のいかないことが多い。

本稿で取り上げる日本古典文学も、その研究価値について大多数の人々の共感を得ることが難しい対象のように思われる。これに対して渡辺麻里子氏（弘前大学人文学部教授）は、現代社会で古典文学を学ぶことの価値を以下のように論じた。

グローバルな学問が推奨されている今、異なる文化を知り視野を広げる古典文学は、グローバルな学問の代表格である。異国の文化を知るのが空間的な横のグローバル研究なら、過去にさかのぼって時空を越える古典文学研究は、いわば縦のグローバル研究である。外国の文化は、実際に行き行って直接見聞することができるが、平安時代や鎌倉時代に行ってみることはできない。書かれた物から当時の出来事や人々の考え方、生き方を探求する古典文学は、究極のグローバル研究である³⁾。

古典文学を、“時空を越える究極のグローバル研究”とする魅力的な定義付けは古典文学研究者に勇気を与えてくれる。さらに渡辺氏は、いま全力で取り組むべきことは、日本古典文学を楽しく読む回路を開き古典文学のファンを増やすことだと言う。筆者も全面的に賛同する。本稿は、古典文学をできるだけ多くの学生に学んでもらい、興味を持ってもらいたいという思いから、これまで工夫してきたいくつかの授業の試みについて報告するものである。

1. 学生の古典文学に対する意識調査

まず、本学の学生たちは古典文学に対してどのような意識を抱いているのか、それを大まかにとらえるため実施したアンケートの結果について報告する。対象とした学生は、『源氏物語』を扱う「日本文学の名作」（文芸文化学科：主体は1年生）と「文化と文学（日本文学）」（メディアコミュニケーション学科4年生）の合同授業の受講生59名のうち、実質対象者49名である。

この授業では、『源氏物語』全体の内容をわかりやすく伝えることを目的に、古語文法にはできるだけ触れず、学生たちが好む漫画やアニメーションも積極的に資料として活用している。アンケートにはその成果を確認する項目を入れているため、15回目の最終授業で実施した。全部で7問の設問のうち、まずは5問目までの結果を報告し解説する。

設問1：あなたが大学入学以前に（高校などで）学んだ古典文学で、覚えている作品名を挙げてください。（数字は得票数）

竹取物語（22） 源氏物語（16） 枕草子（14） 伊勢物語（13） 平家物語（10）
 徒然草（10） 大鏡（9） 蜻蛉日記（5） 更級日記（5） 方丈記（5） 土佐日記（3）
 古事記（2） 万葉集（2） 宇治拾遺物語（2）
 紫式部日記（1） 和泉式部日記（1） 古今和歌集（1） 建礼門院右京大夫集（1）
 とりかへばや（1） 百人一首（1） 今鏡（1） 義経記（1） 奥の細道（1）
 作品名でないもの：姨捨山（2） 深草物語 博雅の三位と鬼の笛 うつば姫

最多数の票を集めた『竹取物語』は、日本昔話の定番の一つで、学生たちが子どもの頃から親しんできた作品である。以下にも教科書に取り上げられる著名な古典文学が並ぶ。全体的に見て平安時代の作品が上位を占めており、古典といえば王朝文学をイメージする学生が多いことがわかる。作品名でないものがいくつか混じていたのは、話の内容が記憶に残っていたものと考えられるが、その一方、上位

に挙げられた著名な古典文学については大方が教科書レベルの理解に留まり、作品全体の内容を知って答えているケースは少ないのではないかと推測される。

設問2：あなたは古典文学が好きですか、嫌いですか。

- | | |
|-------------|-----|
| ① とても好きだ | 9名 |
| ② まあ好きだ | 21名 |
| ③ どちらでもない | 11名 |
| ④ あまり好きではない | 8名 |
| ⑤ 嫌いだ | 0名 |

古典文学に対して「とても好き」「まあ好き」と答えた学生が計30名で、対象者の61.2%を占めていたことは予想外だった。選択科目で『源氏物語』の授業を選んだのだから、不思議ではないかもしれないが、資格課程科目直前の時間帯に開講されているという時間割上の都合で当該授業を受講した学生も多くいたはずである。後の問4で、授業後に古典に対して親近感を得た学生が増えた状況を加味すると、最終授業でのアンケートだったことが影響している可能性も考えられる⁴⁾。

設問3：設問2の質問で答えたこと理由は何ですか。

- ④ (好きでない) …言葉の意味がわからない・文法がわからない・主語が分かりにくい
読みにくい・難しい・面白くない・内容が共感しにくい・昔のものはつまらないだ
ろうというイメージを自分で作っていた
- ① ② (好き) …話が面白い・びっくりするようなオチがある・現代と違うテーマがある
登場人物のキャラクターが個性的・恋の和歌が情熱的・好きな歌がある・当時の文化などが分
かる・今と違う生き方、考え方が学べて面白い・古典の雰囲気が好き
物語が好き・言葉が美しい・風景が美しい・表現力が凄い・人間関係に共感する
現代と共通する内容がある・高校のときから読むのが好きだった・得意分野だ
- ③ (どちらでもない) …積極的に古典に触れる機会がなかったから・難しい(留学生)
あまり読んでことがない

古典文学が好きでない理由として古典の語彙や文法が分からないから、という回答は当然予想できるものだ。その結果として、難しい、面白くないと思い、昔のものは分からないから最初から読まないということになるだろう。古典が好きと答えた学生の中にも、読解は難しいが、と書き添えている回答が多くあった。それでも、内容が分かると面白いので好きになったという。古典が面白いことが分かった学生は、好きな理由を様々な面から挙げてくれた。どちらでもない、と答えた学生の理由が示しているように、古典が敬遠される一番の原因は、古典文学と深く関わる機会がなかったということに尽きるだろう⁵⁾。

設問4：前期に『源氏物語』の授業を受けて、古典文学に対する見方や考え方は変化しましたか。

(括弧内は、設問2の回答による内訳数)

- ① 大変変わった 5 (古典が好き4、嫌い1)

- | | | |
|-----------|----|------------------------|
| ② 少し変わった | 17 | (古典が好き6、嫌い6、どちらでもない5) |
| ③ どちらでもない | 19 | (古典が好き15、嫌い1、どちらでもない3) |
| ④ ほぼ変わらない | 8 | (古典が好き5、どちらでもない3) |
| ⑤ 全く変わらない | 0 | |

設問5：設問4で変化した(①か②)と答えた人は、どのように変わりましたか。

意外と面白かった・今までより興味がわいた・もっと読みたくなった・高校では訳や文法が中心だったが、登場人物の心情を知ることができたので面白いと思えた

昔の生き方を知ることができる・古典は堅苦しい話が多いわけではなかった・『源氏物語』に対する見方が変わった・したたかな女性の生き方を知った

設問4と5は、教員の立場として授業終了後に最も聞きたい内容である。今回はもともと古典が好きな学生が多かったので、授業後の変化を「どちらでもない」とした学生も多かった。なお、「変わった」と答えた理由で嫌いになったというものはなかったので、授業前と後とで古典文学に少しでも興味を持つ学生の割合は以下のように増えたことになる。

「もともと好き」30名+「少しでも好きになった」12名 = 42名

古典が少しでも好きな学生の割合変化 61.2% ⇒ 85.7%

受講生のうち86%の学生が興味を持って聞いてくれる授業は、教員として素直に大変うれしいと思う。この割合をさらに増やすべく今後も努力していきたい。

2. 実践報告(1)「源氏物語双六」の制作

『源氏物語』は、文学、文化、語学等のどのような観点からでも分析することが可能な作品であるため、ゼミ形式の授業でも短大時代から継続して扱っている。ゼミでは基本的に各自が個別の課題を担当して調査発表をするが、授業の最後に受講生全員で協力して何か楽しい課題に挑戦できないかと考えて思いついたのが、「源氏双六」であった。それを2015年度と2016年度に実施した結果、思いがけない学習成果が得られたので報告したい。

〔2015年度〕短期大学部表現文化学科2年生「総合演習」(通年科目)受講生6名

この授業では、『源氏物語』の登場人物を各自が3人ずつ選んで発表し、前期と後期で合計18名の登場人物の人生や特徴、注目すべき場面について討論してきた。全員の発表が終了した時点で、受講生たちは登場人物を通して『源氏物語』の内容の概略をとらえた状態である。授業の総まとめとして、それぞれが最も興味を持った登場人物についてのレポートを課した。そして残りの授業時間は、後期の最後が正月に当たることもあり、『源氏物語』で双六を制作することにした。双六制作は以下のような手順で実施した。

- ① 光源氏の誕生から死去までの物語の中で起きた事件を順に取り出し、項目立てる。
- ② 立てた項目を、光源氏にとって良い出来事と悪い出来事に分類する。
- ③ それぞれの項目に対応するコマの進退(2コマ進む、1回休みなど)を決める。
- ④ 各項目文とコマの指示を書き込んだ紙片をPCで作成する。

⑤ 双六の全体ルートに項目紙片を配置し、ボードに貼り付けていく。

⑥ 出来上がった双六盤でゲームを試行し、進行上の不備を修正して完成させる。

ゼミの発表では光源氏死去後に続く第三部の物語まで扱ったが、双六では光源氏の人生をたどってコマを進めることにしたため、第三部は扱わなかった。学生たちが手分けして挙げた出来事は37項目になった。それを、光源氏にとって良い出来事、悪い出来事、衝撃的な事件に分類し、ピンク色、水色、黄色の色分けと、ハート型、涙型、星形等の型分けをした用紙に印刷した。最後にゲームを試行するのは、コマの進退指示が前後の指示とうまく調整できていないと、永久に上がれないという事態が起きうるからである。

この双六制作ワークによって得られた学習効果を以下に挙げる。

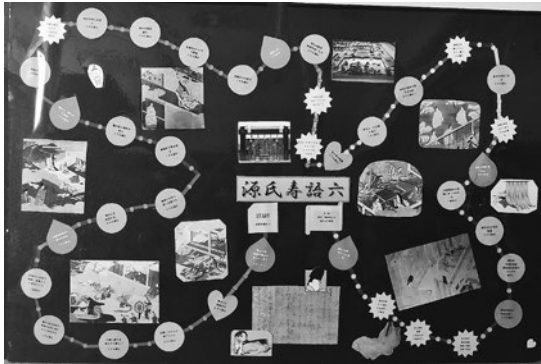
- 1) 光源氏の一生の出来事を順に掲げる事で、物語の粗筋を総復習することができた。
- 2) 光源氏にとって良い出来事が多かった前半生と、悪いことばかりが起きる後半生の違いが、項目用紙の色や形によって一目瞭然となった。
- 3) 学んだ内容を受講生全員が協力して形にする達成感が得られた。

特に2)では、物語最後のゴール直前に、紫の上の死という光源氏にとって最大の苦悩が置かれていることが改めて確認された。学生がこの場所に止まったコマへの指示を、双六盤の中で最も厳しい「スタートに戻る」としたため、ここで最初から双六をやり直す羽目に陥る者が続出した。学生たちも光源氏同様、思うようにならない人生の不条理を体感したのである。

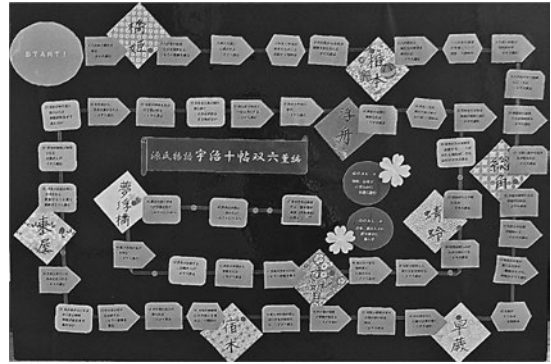
〔2016年度〕人間生活学部文芸文化学科2年生「文芸文化ゼミⅡ」（後期）受講生8名

この授業は2年生対象の半期科目である。1年生が多く履修する「日本文学の名作」の講義科目では『源氏物語』の第二部までしか扱っておらず、その授業を受けた後にゼミを選ぶ2年生の受講生を想定して『源氏物語』第三部を扱うことにした。ゼミの発表課題は、宇治十帖と呼ばれる『源氏物語』の最終話について、1人1巻を担当して内容を紹介することである。最初と最後の2巻は教員が補充し、物語の概略を受講生全員が共有した状態で、最後に「宇治十帖双六」を制作した。宇治十帖は光源氏没後の話なので、光源氏の代わりに物語の初めから終わりまで登場している薫の人生をたどることにして、作成要領は「源氏双六」に習った。

得られた学習効果は1回目の時とほぼ同じであるが、双六のゴールは宇治十帖独特のものとなった。『源氏物語』の最後は、薫と恋人浮舟との再会が実現するかどうか不明瞭なままに閉じられている。そこで双六では、浮舟が最終的にどうなったかという想定を、学生たちが考えた2説に分けてゴールに設定したのである。ゲームでは、ゴール手前のどの場所にコマが止まるかによって、浮舟の運命の終着点に分かれることになる。原作の物語の読み方の揺れを双六に反映させることができた例となった。（図参照）



2015年度作成の「源氏双六」



2016年度作成の「宇治十帖双六」

3. 実践報告（2）和歌の映像資料制作

2015年度に発足した文芸文化学科の新カリキュラムに古典韻文の授業を取り入れたいと考え、『古今和歌集』を扱うことにした。『古今集』（『古今和歌集』の略称）は、平安時代を代表する最初の勅撰和歌集で、当時の王朝文学すべてに強い影響力を及ぼした作品である。平安時代の文学を学ぶために欠かせない和歌知識はもちろん、季節感や心情表現などを通して王朝文化の真髄に触れることが出来る。筆者は和歌については専門外なのだが、『古今集』はどうしても学ばねばならない作品だと考えた。しかし、どのような授業を展開したらいいのか大層悩み、試行錯誤の末に試みたのが、現代メディアを利用した和歌の映像資料制作であった。

〔2016年度〕文芸文化学科2年生「日本文学論A」（前期）受講生14名

〔2017年度〕文芸文化学科2、3年生「日本文学論A」（前期）受講生16名

『古今集』の特徴は、四季の移ろいや恋愛感情を繊細な感覚でとらえ和歌に表現しただけでなく、季節と恋の時間推移を和歌配列に反映させたところにある。それを理解するためには作品全体の概要を知ることが必要だった。そこで、テキストにはすべての和歌が収録されたものを選んだ⁶⁾が、半期の授業で総歌数1100首は到底手に負える歌数ではない。とりあえず、四季の巻と恋の巻に絞っても、合わせて11巻で全20巻の半分以上の分量になる。その中から何十首かを選ぼうとすると、どういう基準で選ぶかが問題となり、一部のみでは作品全体の概要をとらえることも難しくなる。そこで検討した結果、各巻に学生2、3人を割り当てて、一人当たり20~30首の歌を分担して読ませ、その中から気に入った歌を発表してもらうことにした。

授業では、和歌の技巧や歌人についての基礎知識、各巻ごとの和歌の配列と主題の概要について講義し、それと並行して毎時間、学生たちが選んだ和歌の発表時間を設けた。教員が勝手に選択したものを与えるより、学生自身が選んだものについて自ら学ぶ方が学習効果は大きい。さらに学生は好きな和歌を選ぶ時点で、選ばなかった和歌を含めてある程度の分量のテキストに目を通すことにもなる。自分が担当しなかった範囲の和歌は他の学生の選択したもので補う。この方法で受講生全員による『古今集』攻略を図った。

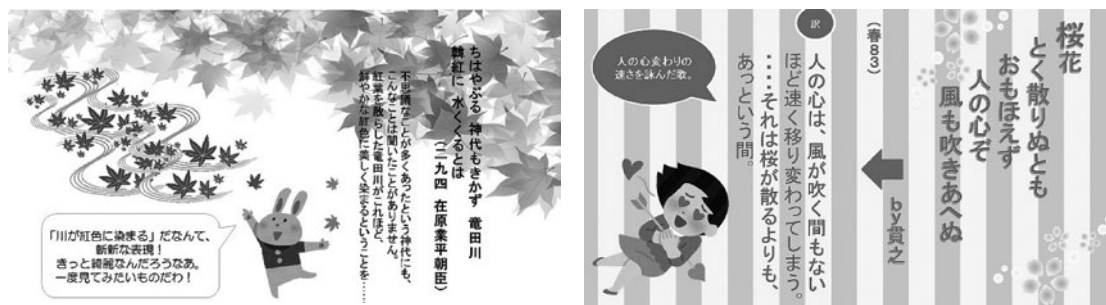
一度目の発表では、学生たちは四季の巻を分担し、好きな和歌についての語句解説、現代語訳、自

由鑑賞の項目を設けたペーパー資料を作成し発表した。ここまでは、学生たちが経験してきた高校の古典学習と似通っているだろう。図書館の参考文献を見れば誰でも基本的な情報が得られるので、学生たちにとってハードルは低い。この発表の中で、各自が選んだ和歌とその読み取り方、さらに資料の作り方にも独自性が現れることを発見し、学生が自らの解釈をさらに深めて文学世界を楽しむことが出来ないかと考えた。そこで、現代語訳の部分について、逐語訳と意識、さらに自由に想像力を働かせて独自の解釈を加える内容訳を紹介した。古典を自分自身の読み取り方で表現する方向に導き、最後の課題につなげたのである。

授業の最終課題は、『古今集』の中から各自の好きな和歌を選び、自分の言葉で現代語訳（意識）をしたら、それを原文と共にパワーポイント画面に組み込んで、後は自由に和歌世界を映像化するというものである。学生たちがどんな和歌を選び、それをどのように受け止めて表現するかに期待した。提出された課題には、和歌に詠まれた風景の美しさ、悲しみや喜び等の心情が色彩豊かな映像として表現された。（図参照）

最終授業で実施した授業評価では、この授業で自分の意見や考えを表現する機会があった、授業に満足したという回答が多かった。他に和歌創作のワークショップを実施したことも影響しているだろうが、最終課題で自分が受け止めた和歌世界を映像化した時の達成感、その映像を皆に紹介する時の高揚感、そして他の受講生の作成した映像を鑑賞する楽しみが学生たちの記憶に残った結果だと考える。

情報メディアを使用した現代ならではの古典享受のあり方として、このような方法で和歌を鑑賞し発信することを古典文学の授業展開方法の一つとして今後も継続していきたい。



学生が作成したパワーポイント画像の例

4. 古典文学の未来

本稿では、古典学習は将来的に価値のあるものだという基本的立場から古典文学の授業展開について考えてきた。これについて、学生はどのような意見を持っているのだろうか。最初に報告したアンケートの残りの2項目を紹介する。

設問6：将来的に古典文学の授業は必要だと思いますか。

(括弧内は、設問2の回答による内訳数)

- ① とても必要だ 12 (古典が好き11、どちらでもない1)
 ② ある程度必要だ 29 (古典が好き14、好きでない7、どちらでもない8)
 ③ どちらでもない 6 (古典が好き4、どちらでもない2)
 ④ あまり必要でない 2 (古典が好き1、好きでない1)
 ⑤ 全く不要だ 0
 必要だ = 41/49 ⇒83.7%

古典文学が好きな学生が、古典の授業は必要と答えるのは自然であろう。しかし、古典文学が好きでない、どちらでもないと答えた学生のほとんどが古典の授業はある程度必要だと答えていることは注目に値する。学生たちは古典の解説が難しくても、古典は学ぶべきだと考えているのである。その理由として様々なことを記入してくれた。

設問7：設問6の質問で答えたことの原因や、古典文学について考えたことを自由に書いて下さい。以下は必要と答えた理由。(文章は異なっても同様な回答をまとめて数えた)

- ・昔の人の考え方や生き方を知ることができるから (7名)
- ・有名な日本文学に対する知識を教養として持っていた方がいいから (6名)
- ・古典文学はその国の文化的遺産であり大切なものだから (5名)
- ・自分たちのルーツを知ることが大切だと思うから
- ・古いものから自分の知らなかったものを発見できるから
- ・古典文学があるからこそ今の文学がある
- ・古典文学でしか学べない(現代小説には真似できない)ことがある
- ・現代のものだけでなく古典文学を読むことで今の自分の考えが深くなるから
- ・よい作品がたくさんあるので、後世につないでいってほしいと思う
- ・古典文学には現代のアニメ・漫画に通じるものがある
- ・面白いし、知っておいて損はない

学生たちは古典文学を自分たちのルーツ、国の文化的遺産と考え、大切なものにとらえている。また、古典文学を学ぶことが現代に役立つと考えている。何より、昔の人の考え方や生き方を知りたいと思い、興味を持っていると答えた学生が多くいたことにとっても励まされた。ちなみに古典の授業を不要とした学生の意見は、「古文は現代にないので不要」「必要ない人は学ばなくても生きていける」という単純なものだった。古典が好きだが授業としては不要と答えた学生の理由は、「古典文学や古典文法だけを教える授業は必要ないのではないか」と、時代にとらわれない文学全般を教える授業を期待するものだった。

以上、本稿では、古典文学の面白さを学生たちに知ってもらうための授業展開の試みと、古典文学に対する学生たちの意識調査の結果を報告した。学生たちは、古典文学に対して予想外の親近感と価値観を抱いていた。対象が文系学科の学生で、しかも古典文学の授業を選んだ受講生だったという要素がかなり作用していたと考える。それでも、古典文学を未来につなげることは可能だという希望が持てた。日本全国で古典文学の面白さを伝える授業が次々と成功し、世間一般にその価値が認められるようになった時、古典研究も大きな飛躍の時代を迎え社会に貢献することが出来ると思う。

註

- 1) 文部科学省が人文社会学系の学部や大学院について、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を求めた（平成27年6月8日通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」）ことに対して、「文部科学省は、国立大学に人文社会学系の学問は不要と考えている」「すぐに役立つ実学のみを重視しようとしている」等の反発が起こった。これに対して文部科学省は再び通知を出し、人文社会学系の学問の重要性を認めた上で、先の通知の文言は、「例えば、いわゆる「新課程」を廃止するとともに、その学内資源を活用して、学生が生涯にわたって社会で活躍するために必要となる能力を身に付けることのできる教育を行う新たな教育組織を設置すること等を想定している」と説明した。（平成27年9月18日、日本学術会議幹事会における文部科学省説明資料「新時代を見据えた国立大学改革」）
- 2) 文部部長金水敏氏は、卒業生に贈る式辞で、「文学部の学問が本領を発揮するのは、人生の岐路に立ったときではないか……人間が人間として自由であるためには、直面した問題について考え抜くしかない。その考える手がかりを与えてくれるのが、文学部で学ぶ様々な学問であったというわけです」と述べた。
- 3) 「日本古典文学のファンを増やすために—文化コードの断絶のなかで」（『リポート笠間』No.29特集1「いま全力で取り組むべきことは何か」2017年5月）
- 4) 横浜国立大学の学校教育課程1年生218名を対象に行ったアンケート調査では、古典について、学生の好き嫌いの比率に差はほとんどなく、普通と答えた4割程度は授業の在り方によって、「好き」にも「嫌い」にも変化する可能性を持っていると報告されている。（安野葵「大学生の古典力調査報告Ⅷ～平成27年度横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程1年次生の古典に関する関心度調査～」『横浜国大言語教育研究』42 2017年3月）
- 5) 前掲注4の調査報告の中で、教員を目指す学生が実際に教師として古典の授業を行う際に不安に思うであろう点をアンケート調査したところ、学生たちが最も多く選んだ選択肢は、「古典作品をあまり読んでいない（56.9%）」ことだったと報告されている。
- 6) 全歌集が収録され比較的安価なものという条件で、角川ソフィア文庫『新版 古今和歌集』（高田祐彦訳注、2009年、角川書店）を使用した。

